

タイトル  
「Natural」

ジャンル：ヒューマンコメディ

上演時間：約2時間

登場人物

吉岡真（17～20）性同一性障害を持つ男子高校生。

吉岡哲也（42～45）真の父。

吉岡美津子（40～43）真の母。

三木隆・琴美（45～48）ニューハーフバー「ピンクドルフィン」のオーナーママ。哲也の先輩

あんこ（38～41）「ピンクドルフィン」のチイママ。

さゆり（35～38）「ピンクドルフィン」の従業員。小太りの小説家志望。

鈴音（30～33）「ピンクドルフィン」の従業員。ダンサー兼振付師。

トンボ（28～31）「ピンクドルフィン」の従業員。東京大学経済学部卒のインテリ。

小雪（25～28）「ピンクドルフィン」の従業員。

カレン（23～26）「ピンクドルフィン」の従業員。超美人オカマ。

男：9名

女：1名

計10名

本編

第一幕 第一場

客入れの賑やかな音楽が流れている。

音楽徐々に小さくなり、明かりが落ちていく。

SE：風にそよぐ風鈴のような音。グラスの中の氷のたてる、カランカランという音。

暗闇にぼんやりとした明かりと音楽が入り、吉岡美津子（40）の姿が浮かび上がる。美津子は日記を書きつつ、物思いにふけている。

美津子「平成13年5月27日、息子が家を出て行った。・・・頭が混乱している。さっき起こった出来事が、頭の中を駆け巡っている。夫の怒鳴り声、あの子の頬を叩く音。そして、玄関が閉まるボタンという音。・・・息子は、真はどうしてしまったのだろうか？ ・ 一体どういうつもりなのだろうか。私は、私にはとても信じられない。・・・いいえ、分かっていた。・・・ずっと・・・ずっと分からないふりをして来ただけなのだ。・・・真が小さい頃か

ら、ずっと感じていた不安、たくさんの疑問、そしていつも突然、津波のように私を襲う恐怖…。全ての答えがこれだったのだ。…最後に言った真の言葉が頭を渦巻き、眠れない。こうやって、日記でも付けていれば少しは気が紛れるだろうか？ …私は…どうしよう、このままでは私は、私はあの子を、殺してしまうかもしれない！…真は、私の息子は、自分は女なのだと、女なのだと、言っている」

明かりと音楽が F・O していき、変わりに賑やかな音楽がクロスで被り、明かりが入ってくる。

ゲイバー『ピンクドルフィン』の店内。

半地下になっていて、出入り口が中二階にある。階段を下りると、幾つかの小さいテーブルと椅子がおいてあり、店の奥に向う出入り口が一つある。

隅のテーブルで、さゆり（35）が何か書き物をしている。その横で、鈴音（30）が興味深そうに覗いている。

突然店の奥から、大きな声が聞こえる。

かれん（声）「え～！ 彼から貰ったの～？！」

かれん（23）が、ブランド物の可愛いバッグを持って出てくる。

それを追って出てくる、小雪（25）

かれん「ちょっと、聞いて聞いて！」

鈴音「あら、それ〇〇の新作バッグじゃない？！ どうしたのそれ？！」

さゆり「可愛い～！」

かれん「あのね、小雪ちゃんたらね、」

小雪「かれんちゃんたら！ 言っちゃだめ」

かれん「別に減るもんじゃないしいいじゃない」

小雪「恥ずかしいから嫌よ」

鈴音「何？ どうしたのよ」

かれん「実はね、」

さゆり「うんうん」

かれん「彼からの、プレゼントなんですって！」

小雪「や～ん、もう！ 恥ずかしい！」

さゆり「え～！ 彼って、プレゼントくれたりするものなの～？！」

かれん「何当たり前の事で驚いてるの？ さゆりちゃん」

さゆり「当たり前、なの？」

かれん「勿論！ 男なんて、貢がせてなんぼでしょ？」

小雪「かれんちゃんは綺麗だから」

かれん「ありがと」

鈴音「かれんちゃんの部屋は、男からの貢物で一杯だものね」

かれん「まあね」

小雪「さゆりちゃんは、付き合った人から一回もプレゼント貰った事ないの？」

さゆり「いや～ん、さゆり恥ずかしい！！！」

鈴音「さゆりちゃん、恥ずかしがるところ違ってるわよ」  
さゆり「そう？」  
小雪「さゆりちゃんが一番最近付き合ったのって、いつ？」  
さゆり「(遠い目をして) そうねえ、かれこれ12年前になるわねえ・・・」  
かれん「え～！12年前～?!」  
小雪「そんなに・・・」  
さゆり「そう・・・いい加減干からびちゃうわ」  
鈴音「ねえねえ、その12年前に付き合った人って、どんな人？」  
さゆり「どんな人って、普通の人よ」  
小雪「何してた人？」  
さゆり「何って、大学の先輩よ」  
鈴音「それでそれで？」  
さゆり「別にたいした事じゃないわよ。ただ、私それまで本当に普通だったのね、女の子とも付き合った事あるし」  
かれん「へえ！」  
鈴音「あら、私もあるわよ、中学生の時」  
さゆり「私は高校1年だったわ」  
小雪「それでそれで？」  
さゆり「相手は山口有里ちゃんって言ってね」  
小雪「そっちじゃなくて、12年前の人の事よ」  
かれん「そうそう」  
さゆり「あのね、私大学で柔道部に入ってたの。そこに、すごく強くて、オリンピック候補って言われてた、鈴木太郎先輩(仮名)がいたのね」  
かれん「何で仮名なの？」  
さゆり「恥ずかしいから」  
鈴音「だから、恥ずかしがるところ違ってるわよ」  
さゆり「そうかしら？」  
小雪「で？」  
さゆり「ある日、私鈴木先輩(仮名)に朝練の呼び出し受けたの」  
鈴音「うん！」  
さゆり「私すごく憧れてたから、物凄く張り切って道場に行ったの！」  
かれん「そしたら？」  
さゆり「そしたら、道場には鈴木先輩(仮名)しかいなかったのね」  
小雪「うんうん！」  
さゆり「私がキョトンとして、鈴木先輩(仮名)を見てると、先輩はおもむろに私に飛び掛って、こう言ったわ」  
鈴音「キャ！」  
さゆり「斉藤！ あ、これ私の名前ね」

かれん「知ってるわよ！」

さゆり「斉藤！ コレが本当の寝技だ！ オリンピック級の寝技だ！ 受けてみろ！ っ  
て」

小雪「受けちゃったの？」

さゆり「…受けちゃった。15秒でギブアップって感じだったわ…」

鈴音「(うっとり) 素敵ねえ…」

小雪「ねえ、鈴音ちゃんは？」

鈴音「え～、わたしい？ 恥ずかしいわよお」

さゆり「私にばかり言わせてずるいわよ、鈴音ちゃん！ あなたも言いなさいよ、初体  
験話」

鈴音「分かったわよ。私は高2の時。当時私暴走族だったの」

さゆり「暴走族?!」

小雪「意外と多いらしいわよ。そっち方面の人」

鈴音「ほらっ硬派な族は女人禁制だから。で、その時の総長が20歳になって、引退する  
事になったの。私次の総長って事になってて、彼が自分の特攻服を私に譲るから家に来  
いって言うの」

さゆり「それで？」

鈴音「家に行ったら、ここで着てみろって言われたわ。そしたら私、服脱ぐじゃない？ そ  
れでえ」

さゆり「キャ～!!!」

かれん「さゆりちゃんうるさい」

さゆり「だってえ！」

かれん「それで？」

鈴音「いやあん、その後は分かるでしょ？」

かれん「鈴音ちゃんも、それまで全然普通だったんでしょ？ 平気だったの？」

鈴音「それが不思議なのよねえ。何故だか、もうこの人とは会えなくなっちゃうんだなあ  
と思ったら、やられちゃってもいいかなあなんて思っちゃったの」

かれん「へえ、そういうもんなのかしら？」

鈴音「人それぞれだから、よく分かんないけど、私の場合はそうだったのよねえ」

かれん「私なんて、物心ついた時からこんなだったから、小さい時は『オカマオカマ』  
って、物凄くいじめられたのよ」

小雪「可哀相…」

かれん「中学の時、すっごく好きな子がクラスにいたの。その子、誰もいない時は優しい  
んだけど、大勢になると、先頭に立って私をいじめてたの」

小雪「ひど～い！」

さゆり「もしかして、その子が初めての子？」

かれん「…ううん、違うわよ」

さゆり「じゃあ、誰？」

かれん「中学の教育実習の先生」

小雪「教育実習生?!」

かれん「そう。中2になってすぐの時なんだけど、例の男の子に体育準備室に呼び出されたの」

鈴音「それで?」

かれん「行かなきゃいいって言えばそれまでなんだけど、好きだったから、行っちゃうのよねえ」

鈴音「悲しい乙女心よね」

さゆり「分かるわあ」

かれん「で、いつものようにいじめられてて、その時先生が通り掛って助けてくれたの」

さゆり「うん」

かれん「最初は『お前もしっかりしなきゃ駄目だぞ』なんて叱られてたんだけど、よく分かんないうちにキスされちゃって、そのまま押し倒されたって感じ?」

鈴音「それって素敵! 体育準備室っていうのがミソよね」

小雪「甘酸っぱい青春の思い出って感じね?」

さゆり「私もそんな先生に押し倒されたいわあ」

かれん「じゃあ今度雅信紹介するわ、高校の先生やってるから」

鈴音「雅信って、今のかれんちゃんの彼氏じゃないの」

かれん「一週間前に別れたから、もう彼氏じゃないわよ」

鈴音「もう別れたの?!」

かれん「もうって、3ヶ月も付き合ったわよ」

さゆり「たった3ヶ月…。私なら、一度捕まえたら二度と離さないわ!」

かれん「だって雅信、お金ないんだもん」

さゆり「そんな事言って、次から次に男取り替えてると、そのうち誰もいなくなっちゃうわよ」

かれん「大丈夫、今日だって、小雪ちゃんの彼の友達紹介してもらうんだもん」

鈴音「えっ?! 友達?!」

かれん「そっ。同じ会社マンなんですって!」

さゆり「いいなあ、私も行く!」

小雪「えっ?」

かれん「駄目! 友達一人しか来ないから」

さゆり「そんなあ、かれんちゃんばっかりずるいわよお、ね、鈴音ちゃん!」

鈴音「そうよそうよ」

かれん「(さゆりと鈴音を鼻で笑い) あら、それは仕方ないんじゃない?」

さゆり「どうしてよ!」

かれん「(その顔じゃあ…。といわんばかりに) だってえ…。」

さゆりと鈴音をこバカにしたように、頭の先から足先までジロジロと見つめるかれん。

さゆり「嫌な視線ね」

鈴音「本当」

かれん「そうかしら？」

さゆり「そうよそうよ、どうせ私は12年間干からびオカマよ！」

鈴音「さゆりちゃん、かれんちゃんはそのまでは言っていないわよ・・・」

小雪「（取り成すように）えっと、さゆりちゃんはほら、今忙しいんじゃないの？」

さゆり「何で？」

小雪「小説よ、小説！ 何かの応募の締め切りがあるって言ってたじゃない」

さゆり「まっね」

小雪「いまは彼氏作ってる場合じゃないんじゃない？」

さゆり「それとこれとは話が別よ」

かれん「二兎を追うものは一兎も得ずって言うわよ、さゆりちゃん」

さゆり「かれんちゃんに言われたくないもん！」

小雪「（また取り成すように）えっと、今も書いてたんでしょ？」

さゆり「ええ」

鈴音「とっても面白そうなのよ、小雪ちゃん！」

小雪「へえ！」

鈴音「この前読ませて貰ったのも、物凄く面白かったわあ」

さゆり「本当？」

小雪「それって『炎と情熱と胸騒ぎのロンド』の事？」

鈴音「そう！」

小雪「私も読んだわあ」

鈴音「何かこうめくるめくって感じだったと思わない？」

小雪「思う思う！」

かれん「炎と情熱？」

さゆり「小説のタイトルよ」

かれん「（訝しげに）どんな話なの？」

さゆり「あのね、オラウータンの国の王子様が、UFOに連れ去られて、火星人のオカマと結婚するの。そして2人で力を合わせて、地球を冥王星の侵略から守るのよ」

かれん「火星人のオカマ？」

鈴音「（夢見るように）何かロマンティックよねえ・・・」

小雪「王子様とベロッチャーの結婚式のシーンなんて、あまりにも素敵で、思わず呻いちゃったわ」

かれん「ベロッチャー？」

小雪「火星人のオカマの名前よ」

かれん「（呆れて）相手オラウータンでしょ？」

小雪「（うっとり）そうよ」

さゆり「そこが一番苦労したところなの！」

鈴音「やっぱり！ さすがさゆりちゃんって感じだったわよ」  
 小雪「情景が浮かんできたわ」  
 かれん「（眩いて）2人共マニア入ってるでしょ」  
 鈴音「えっ？」  
 小雪「今書いてるのはどんな話？」  
 さゆり「『紫の滝の麓で飲む玉露』っていうの」  
 小雪「（ゆっくりと）『紫の滝の麓で飲む玉露』…（溜息）素敵ねえ…」  
 鈴音「タイトルだけでもそそられるわよねえ」  
 小雪「それってSFね！」  
 さゆり「そう！ スペースアドベンチャーって感じにしようと思ってるの」  
 鈴音「早く読みたいわあ」  
 かれん「小雪ちゃん」  
 小雪「何？」  
 かれん「ひとつ質問してもいいかしら？」  
 小雪「何？」  
 かれん「どうして『紫の滝の麓で飲む玉露』ってタイトル聞いただけで、SFだって分かるの？」  
 小雪「どうしてって…誰にだって分かるんじゃない？」  
 鈴音「（驚いたように）もしかしてかれんちゃん、分からなかったの…？」  
 かれん「（当然というように）全然」  
 さゆり「変ねえ。まっ、かれんちゃんは変わってるから」  
 かれん「えっ？」  
 鈴音「私ね、将来さゆりちゃんの本を舞台にして、その主役を踊るのが夢なの！」  
 小雪「鈴音ちゃんはダンサー志望だものね」  
 鈴音「ええ！ 出来たら『炎と情熱と胸騒ぎのロンド』で、ベロッチャー役をやりたいわあ」  
 さゆり「実はベロッチャーって、鈴音ちゃんをモデルにしてるのよ」  
 鈴音「うっそ～！ 嬉しい！！！」  
 小雪「ね、さゆりちゃん『炎と情熱の胸騒ぎのロンド』結果どうだったの？」  
 鈴音「コバルト小説新人賞ね、私も気になってたのよ！」  
 さゆり「それが、まだ何も言ってこないのよ」  
 鈴音「もう結果出てもいい頃なのに、どうしたのかしらね」  
 かれん「（平然と）それは落ちたって事なんじゃないの？」  
 鈴音「そんな訳ないわよ」  
 小雪「私もそう思うわ！ だって物すごく面白かったもの」  
 かれん「2人共マニアだから」  
 小雪・鈴音「マニア？」

店の奥からゲイバー『ピンクドルフィン』のママ、琴美（45）が、チイママ

のあんこ（38）を連れて出て来る。あんこは関西弁を話す。

あんこ「あら、あんたらまだおったん？」

琴美「小雪ちゃんは、これから桜井さんとデートなんでしょ？」

かれん「私も行きまあす！」

琴美「若い人はいいわねえ」

あんこ「時間はええの？」

小雪、時計を見る。

小雪「そろそろかしら？」

SE 電話のベル

かれん「私出まあす！」

かれん、店の奥へ行く。

と、いきなり階段の上から大きな声が聞こえる。

トンボ（声）「出来たあ！」

あんこ「あー！ びっくりした！！ 何なの急にあんた！」

トンボ（28）が、階段から降りてくる

トンボ「出来たのよお！ ピンクドルフィン再建計画！」

鈴音「再建計画？」

あんこ「あんたね、再建してどうすんの。まだうちは潰れてません！」

トンボ「あら、この不景気この先何があるか分からないのよ。いざとなった時、こういう事をちゃんとやってるか否かで、その先の状況が変わってくるの。教授がそう言ったわ」

鈴音「（感心して）すごいわあ。さすが東京大学、経済学部卒ねえ」

琴美「（少しありがた迷惑な感じで）ありがたく貰っておくわ、トンボちゃん。その時が来たら使わせて貰うから」

トンボ「私の頭脳をフル回転して、しっかり計画立てておいたわ！」

琴美「ありがと（溜息）来ない日を祈るけど・・・」

あんこ「全くあんたって子はもう！ そんな事してる暇があったらな、今の状況をようする計画でも立てなさい！」

トンボ「そっちも万全よ、はいこれ」

トンボが、数枚の紙をあんこに渡す。

あんこ「何これ？」

トンボ「ピンクドルフィン売上3倍化計画」

あんこ「3倍?!」

トンボ「そ、まず一枚目をよく見て頂戴」

あんこ、トンボから貰った用紙をよく見る。

あんこ「ピンクドルフィン売上3倍化計画第1項？」

かれんが出てくる。

かれん「ママあ、電話よ」



琴美「私？」

かれん「そ、弟さんだって」

琴美「弟？ 何言ってるの、そんなはずないわよ」

かれん「でもそう言ってるわよ」

琴美「（訝しげに）変ねえ・誰からかしら？」

琴美、店の奥へ行く。

さゆり「あんこちゃん」

あんこ「何？」

さゆり「ママに弟っているの？」

あんこ「いる事はいるけど」

小雪「いる事はって？」

あんこ「弟がこの店の事知ってるはずないんよ」

かれん「どういう事？」

トンボ「ママの家族は、ママがオカマやってるなんて知らないからでしょ」

あんこ「随分若い時に家出てるからなあ」

小雪「そっか、そういえばそうよね」

あんこ「その後は全く実家と連絡とってないってゆうてたわ」

さゆり「じゃあ弟がこの店の電話知ってるはずないじゃない」

かれん「でも今の電話の人、私がピンクドルフィンですって言ったら、琴美ママの弟ですが、ママはいますか？ って言ったのよ」

あんこ「おかしいわねえ・・・」

琴美戻って来る。少しボーっとしていて、おかしい。

あんこ「ママ、電話誰からやったん？」

かれん「やっぱり弟さん？」

琴美「・・・」

トンボ「ママ？」

琴美「・・・」

鈴音「ママ！ どうしたの？」

琴美「（ハッとして）はい！ 何かしら？」

あんこ「何かしらじゃないわよママ。電話誰からやったん？」

琴美「えっ、電話？」

あんこ「そうや、やっぱり弟さんやの？」

琴美「いやあねえ。そんなはずないでしょ。間違い電話よ、間違い電話」

かれん「間違い？」

琴美「そう。もうやんなっちゃうわよねえ、このバタバタして忙しい時に」

鈴音「店終わったし、別に忙しくないわよ」

トンボ「この頃は店開けてても忙しくないけど」

あんこ「トンボ！」

琴美「(慌てて) あらそうね、私ったらもう。いやあねえ年かしら？」  
かれん「でも確かに弟って」  
さゆり「かれんちゃん耳遠くなってんじゃないの？ 一度医者に行ってみたら？」  
かれん、さゆりにあかんべーをする。  
かれん「べ〜だ！」  
さゆり「こっちこそべ〜だ！」  
あんこ「さゆり、あんた一回りも下のかれんと、互角に喧嘩してどうすんの」  
さゆり「だってあんこちゃ〜ん！ かれんちゃんたら自分ばかりずるいのよ〜！」  
あんこ「はいはい分かった分かった」  
琴美「小雪ちゃん、時間じゃないの？ デート遅れるわよ」  
小雪「本当だ！ かれんちゃん、もう出なくちゃ！」  
かれん「(ママを少し気にしながら) うん分かった、バッグ取ってくる」  
かれんは店の奥にバッグを取りに行く。  
あんこ「ママ？」  
琴美「なあに？」  
あんこ「・・・何かあったん？」  
琴美「何もないわよ、どうして？」  
あんこ「本当に？」  
琴美「・・・(きっぱりと) 本当よ」  
あんこ「・・・そう、分かったわ」  
かれん、バッグを手に戻って来る。  
かれん「お待たせ！ 小雪ちゃん。行きましょ」  
小雪「うん！」  
かれん「じゃ、お疲れさまでしたあ！」  
あんこ「はい、行ってらっしゃい」  
小雪「いってきまあす！」  
琴美「はい、楽しんでらっしゃい」  
トンボ「お疲れ様あ」  
さゆり「いいなあ・・・」  
鈴音「本当・・・」  
かれん「さゆりちゃん！ 素敵な小説た〜くさん書いてね」  
さゆり「もう！ むかつく〜べ〜だ！！！」  
かれん「(笑って) さゆりちゃんたらコワ〜イ！ じゃね」  
ケラケラと笑いながら、階段を登って帰っていくかれん。  
小雪「かれんちゃん、待って〜！ お疲れ様あ！」  
小雪もかれんを追って出て行く。  
琴美「さて、私たちも帰りましょうか」  
あんこ「そうね。それにしても、今日も暇だったわねえ、ママ」

琴美「本当ねえ。やっぱり不況なのねえ・・・」  
トンボ「だから、私の売上3倍化計画を見てよ！」  
あんこ「あら、そういえばさっき紙貰ったな、どれどれ」  
さゆりと鈴音もあんこの側によってくる。  
あんこ「ピンクドルフィン売上3倍化計画第1項。（読み上げる）まず、この不況を乗り切る為には、今までの常識を打ち破るような事をしなければならない。ふんふん」  
さゆり「例えば？」  
トンボ「その先を読んで頂戴。具体例を箇条書きにしてみたから」  
あんこが読んでいる間、琴美は一人、皆の輪から離れて、椅子に座り物思いに沈んでいる。  
あんこ「第一、納涼お化け大会を催す。これは一見お金が掛かりそうだが、うちにはノーメイクでいけるキャラクターがいるので、メイク代は案外掛からないはずである」  
トンボと鈴音は、ちらちらとさゆりを見つつ、クスクス笑いをしている。  
あんこ「第二に、デカ盛の大食い大会を催す。この場合、優勝者には相当の賞金を出すという事を前面に打ち出していくのだが、結局うちのメンバーが、実力で優勝出来るはずなので、賞金も掛からず、派手な印象を与えられるので、やってみる価値はあると思う。第三に、」  
さゆり「（少し咎めるように）あの、トンボちゃん」  
トンボ「何？」  
さゆり「こういう書き方はよくないと思うの」  
トンボ「あら、何が？」  
さゆり「これじゃ、鈴音ちゃんが可哀相だと思う」  
鈴音「(心底驚いて) えっ？ 私？」  
さゆり「鈴音ちゃん！ ちゃんと嫌な時は嫌って言わないと駄目よ」  
鈴音「何の事？」  
さゆり「鈴音ちゃんは人が良過ぎよ。ノーメイクでいけるキャラクターなんて書かれても、全然怒こらないなんて。これじゃまるで鈴音ちゃんは素顔が化け物みたいだって言うようなもんじゃないの！」  
あんこ「あんたバカ？」  
さゆり「バカって言ったら、自分がバカ！」  
トンボ「何か私の頭脳を駆使して作った計画が、ドンドン汚されていくような気がするの・・・」  
鈴音「トンボちゃん」  
トンボ「何？」  
鈴音「ノーメイクでいける人って、私の事なの？ 私てっきりさゆりちゃんの事だと思ってたんだけど・・・」  
さゆり「まっ、鈴音ちゃん。ちゃんと自分を知らなくちゃいけないわ！」  
トンボ「さゆりちゃんが知るべきだと思うの」

さゆり「(キョトンとして) どういう意味？」

あんこ「ママ、このバカになんかゆうたって！」

物思いに沈んでいる琴美は、全然反応しないている。

さゆり「バカって言ったら自分がバカ！」

あんこ「あーもう…ママゆうたって」

琴美「…」

あんこ「ママ？」

トンボ「…ママ?!」

琴美「えっ? はい、なあに？」

あんこ「なあにじゃないわよ、ボーッとして! やっぱり何かあってんな」

琴美「違うわよ、ちょっと疲れただけ。ごめんなさいね」

鈴音「毎日こんなに暇なのに？」

琴美「暇だと反って疲れるものなのよ」

鈴音「そう…」

あんこ「…」

突然階段の上から声がする。吉岡 真(17)が学生服姿で立っている。

真「あの…」

階段を下りてくる真。

あんこ「えっ？」

トンボ「あ〜! びっくりした！」

琴美「はい」

真「あの…ここ『ピンクドルフィン』ですよね？」

琴美「そうだけど」

真「あの…ママさん、ですか？」

琴美「…ええ、そうよ。私がピンクドルフィンのママだけど、あなたはどなた？」

真「吉岡です。吉岡真です」

琴美「吉岡、真君」

真「はい」

琴美「どうぞ」

琴美、真を店の中央の席を勧める。

真「すいません。(あんこ達に) こんばんは」

あんこ「はい、こんばんは」

トンボ・鈴音「…こんばんは」

さゆり「ねえ、幾つ？」

真「17です」

さゆり「17?! わっかあい」

鈴音「高校生？」

真「はい、3年です」

トンボ「ふ～ん」

琴美「さ、お座りなさい」

真「あの！ ……三木、隆さんですよ」

琴美「！ ええ、そうだけど、どうして知ってるの？」

真「……お願いします！ 僕を、僕をこの店で雇って下さい！」

琴美「えっ？」

真「何でもします！ 学校だって辞めます！ だから、だからお願いします！ どうか僕をピンクドルフィンで雇って下さい！ お願いします、お願いしますから！」

真、必死に頭を下げる。

トンボ「あらら」

琴美「（溜息）困ったわねえ…」

真「お願いします。どうしてもここで働きたいです！ ここじゃなきゃ駄目なんです！ お願いします、雇って下さい！」

あんこ「ちょっとあんた、頭上げなさい」

真、頭を上げる。

あんこ「あんたまだ高校生やろ？」

真「学校はすぐ辞めます」

あんこ「そういう問題とちゃうのよ」

真「…」

あんこ「こういう店ではね、18歳未満は働いたらあかんの」

真「え？」

あんこ「風営法っていうのがあってな、それで決まってるのよ」

トンボ「今のあんたを雇って、それがばれたりしたら大変なの。分かった？」

真「…」

琴美「吉岡君、だったわね」

真「…はい」

琴美「何があったの？」

真「え？」

琴美「大体分かる気はするけど、でも今のあなたを雇う事は出来ないわ。それは分かってね」

真「…はい…」

琴美「さ、お座りなさい。鈴音ちゃん、お茶持ってきてあげて」

鈴音「はい」

鈴音、店の奥へとお茶を取りに行く。真は勧められた席に、力尽きたように座る。向いには琴美も座る。

琴美「で、何があったの？」

真「…出て行けって言われて…」

琴美「誰に？」

真「父さん・・・」

琴美「そう」

真「もうこれ以上、我慢が出来なくなっちゃって・・・」

琴美「（溜息）何に？」

真「・・・今の自分のままでいる事・・・。僕、本当は女なのに、女の子なのに、こんな身体で・・・父さんや母さんにずっと嘘付いたまま今までやってきて、本当は女なのに、男みたいに過ごして、それで・・・」

琴美「落ち着いて話さない。順番はどうでもいいから、ね」

鈴音、真にお茶を出す。

鈴音「どうぞ」

真「すみません・・・」

真、お茶を一口飲む。

真「そろそろ受験なんです。でも大学なんて全然行く気なくて、そう父さんに言ったんです。そしたら、大学にも行かないでどうする気だ、お前も一人前の男なら、少しは将来の事も考えろって怒鳴りだして・・・」

琴美「そう」

真「それで僕・・・どうしても我慢が出来なくなっちゃったんです！ だって、だって僕は女なのに、男なんかじゃないのに！ それなのに一人前の男ならって。・・・だから、だから僕は男なんかじゃない、女なんだって、女なんだって言っちゃって・・・」

さゆり「あらっ」

真「こんなふうに言うつもりじゃなかったんです！ 本当です！ だけど、もう止まらなくなっていて、次から次に言葉が出てきちゃって、それで・・・」

琴美「それで？」

真「（頬を抑えて）ここ打たれて、出て行けって言われました」

さゆり「ひっど～い！ 女の子の顔ぶつなんて最低！」

鈴音「本当本当。ね、トンボちゃん」

トンボ「・・・仕方ないんじゃない？」

鈴音「どうして？」

トンボ「・・・私、向こうで新しい計画練ってくる」

鈴音「え？」

トンボ、店の奥へ入って行く。

鈴音「トンボちゃん・・・？」

あんこ「・・・（トンボを見送り）自分の息子に、いきなり私は女ですって言われて、はいそうですかって言う親は、どこにもいてへんって事よ」

さゆり「それはそうかもしれないけど、でもぶつ事ないんじゃないの？」

あんこ「あんたの親かて、いきなりあんたが、私女になりましたってゆうたら、この子の親と同じ事するわよ」

さゆり「（不満げに）なに怒ってるの？ あんこちゃん」

あんこ「別に怒ってへんわよ」

さゆり「怒ってるわよ。ね、鈴音ちゃん」

鈴音「…うん」

さゆり「ほら、鈴音ちゃんだってそう言ってるじゃない」

琴美「（少し咎めるように）さゆりちゃん」

さゆり「…はい…」

あんこ「…（真に）黙ってる訳にはいかへんかったんか？」

真「えっ？」

あんこ「ずっと隠し通す訳にはいかへんかったんかって聞いているのん」

真「…」

琴美「（優しく）あんこちゃん」

あんこ「（チラッと琴美を見て、真に）ごめん、そうじゃなくて、（溜息）世の中にはね、知らない方が幸せって事もあるねんよ」

真「えっ？」

あんこ「あんたは今までずっと、すごい大きな荷物を、自分一人で背負ってたんや」

真「荷物？」

あんこ「そ、自分の身体の事や」

鈴音「あんこちゃん…」

あんこ「あんたは親に、自分は女なんやって言う事で、あんたの荷物の半分を、無理矢理親に背負わせた事になるんやで、分かる？」

真「僕が…？」

あんこ「そう。ええか、あんたがそういう身体で生まれて来たんはな、あんたの運命や。

どんなに荷物が重うても、他の人に背負わせたらあかん。例えそれが家族であってもな」

真「…」

あんこ「勿論うちかて、家族に理解して貰いたい、ちゃんと知ってほしいっていうあんたの気持ちはよう分かるよ。でもな、そんなに軽い荷物と違うやろ」

真「…はい…」

あんこ「今更言っても仕方ないけど、ただお父さんがあんたを叩いたり、出て行けって言うたんは、お父さんの気持ちになったら当たり前やって事」

真「…はい」

さゆり「あんこちゃん」

あんこ「…ごめん、着替えて来るわ」

あんこ、店の奥へ行く。

琴美「（真に）心配しなくていいわ。ただあの子、ううん、あの子だけじゃないわ。この店で働いている子皆、家族に自分の身体の事話してないの。特にあんこちゃんとトンボちゃんにはいろいろあってね、家族に打ち明けるって事に、すこし敏感になってるの」

真「僕…」

琴美「大丈夫、けっしてあなたの事を怒ってる訳じゃないの。それに、こういう事は人そ

れぞれなんですものね」

真「・・・」

鈴音「ね、真ちゃん」

真「はい」

鈴音「どうしてママの本名知ってるの？」

真「父さんが、三木さんの事を知ってるからです」

琴美「お父さん？」

真「はい、会社の先輩で、昔とてもお世話になったって言ってました」

琴美「えっ？」

真「三木さん昔、三ノ輪物産に勤めてましたよね」

琴美「・・・ええ・・・」

さゆり「三ノ輪物産?! すっご〜い！」

鈴音「ママって、超エリートだったのねえ」

琴美「そんな事ないのよ」

鈴音「ママ昔の事、全然話してくれないから」

鈴音に微笑みかける琴美。

琴美「(真に) ね、もしかしてお父さんって、吉岡哲也君の事かしら？」

真「覚えてくれてたんですね」

琴美「覚えてるわよ、当たり前じゃない！」

真「よかった・・・」

琴美「やだ! 懐かしいわあ。お父さんお元気？」

真「はい」

琴美「(懐かしそうに)・・・そう。でもよくここが分かったわねえ。吉岡君は私がこの世界に入った事、知らないはずなんだけど」

真「何年か前、父さんが雑誌を見ていたら、この店の事が載ってたんです」

複雑な微笑を浮かべる琴美。

琴美「・・・さぞかし驚いたでしょうね・・・」

真は首を横に振る。

真「父さん言ってました。『父さんは、三木さんっていう人をよく知ってる。あの人がこういう事をしたのなら、それは本当にたくさんの事を考えた末の事だと思う。だから、父さんや他の人がどうこう言う問題じゃないんだよ』って」

琴美「そう・・・」

真「だから僕、ここに来ようって思ったんです」

琴美「そうだったの」

真「(寂しそうに) でも父さん・・・変わっちゃったのかもしれない・・・」

琴美「・・・真ちゃん」

真「はい」

琴美「あなたにうちの店で働いてもらうわ」



真「えっ？」

鈴音「ママ！」

琴美「ただし、高校を卒業してからね」

さゆり「なんだあ」

真「それは」

琴美「それからもう1つ条件があるの」

真「条件？」

琴美「そう。いい？ 今すぐ家に帰って、ここで働く時も、家から通う事」

真「えっ?!」

さゆり「家になんて帰れっこないじゃない！」

琴美「何故？」

さゆり「だってこの子、全部親に言っちゃったのよ！ さっきそう言ってたじゃない！」

琴美「そうね」

さゆり「だったら！」

琴美「それでも帰るのよ」

さゆり「ママ……」

琴美「高校を卒業する事、それからこの店には家から通うこと。この2つがうちで働いて貰う条件よ」

真「家にはもう……」

鈴音「真ちゃん……」

琴美「どうするの？」

真「……分かりました。そうします」

さゆり「真ちゃん！」

琴美「そう。じゃあもう帰りなさい」

真「……はい」

真、静かに立ち上がり、階段の方に向かって歩いていくが、途中すがりつくような視線で振り返る。

真「あの！」

琴美、その視線を平然と受け止め、

琴美「お疲れ様。高校を卒業したらいらっしゃい」

真「(溜息) はい。……お疲れ様でした」

さゆり「真ちゃん！」

真、さゆりと鈴音に挨拶をする。

真「お疲れ様でした。失礼します」

真、階段を上がり、出て行く。

さゆり「ママ！ あれじゃあんまりよ！ 可哀相じゃない！」

鈴音「私もそう思う……」

あんこが着替えて出てくる。真がいないのに気づき、

あんこ「あの子、どうした？」  
琴美「…家に帰ったわ」  
あんこ「家に？」  
さゆり「ママがあの子に、今すぐ家に帰れって言ったのよ！」  
あんこ「えっ？」  
さゆり「おまけにうちで働く時も、家から通えだなんて言うの！」  
あんこ「そう…」  
鈴音「やっぱり可哀相よねえ…」  
さゆり「家になんて帰れっこないじゃないの。そんなのママだって分かってるでしょ?!」  
琴美「そうね」  
さゆり「もう！ ママったら何考えてるの？」  
あんこ「…あの子、何て答えた？」  
鈴音「えっ？」  
あんこ「ママに家に帰れって言われて、あの子はなんて答えたん？」  
鈴音「…分かりましたって」  
あんこ「そう…」  
琴美「さっきあんこちゃんが言ってたわね」  
あんこ「えっ？」  
琴美「自分の荷物は自分で背負えって」  
あんこ「ごめんなさい。何か変な事ゆうてしもて」  
琴美「ううん、ちっとも変な事じゃないわ。全部本当の事ですもの」  
鈴音「ママ…」  
琴美「あの子はね、これからそれをやる所なの」  
あんこ「えっ？」  
琴美「私たちとは違った方法で荷物を背負うのよ」  
あんこ「あの…」  
琴美「（微笑む）あの子を見てたら、私は自分の親に対して、何をしてきたんだろうって考  
えちゃったわ」  
あんこ「えっ？」  
琴美「親に、自分を理解して貰う為の努力なんて、何にもしてこなかったわ。認めてもら  
えるなんて思ってなかったし」  
あんこ「それは仕方ないわよ。所詮無理な話やもん」  
鈴音「…そうよねえ…」  
琴美「そうだったのかしら…」  
さゆり「えっ？」  
琴美「…何でもないわ…」  
あんこ「ママ？」  
音楽大きくなって、明かり F・O。暗転。

続きはあらすじ（ホームページ内 <http://www.supercomplex.net>）をご覧ください。